JR ローカル線維持・利用促進協議会　議事要旨

＜開会挨拶＞

【服部委員(兵庫県副知事)】

会議の開会にあたり、一言ご挨拶を申し上げる。

各ワーキングチーム代表市長の皆様、そして JR 西日本の國弘支社長様をはじめ、委員の皆様におかれては日頃より県政全般に対して各方面でご支援、ご協力を賜り厚く御礼申し上げる。昨年度は県内の JR ローカル線の維持・利用促進を図るため、各ワーキングを中心に熱心に議論をいただき感謝申し上げる。おかげさまで２月には利用促進策を取りまとめることができた。

今年度はこの協議会の名称から「検討」という文字を外した上で、同様の体制を継続することとしている。施策の実施及び検証と改善点の検討、それらの情報共有を行いたい。

利用促進施策は、既に昨年度から実施していただいているもの、そして今年度の４月から新たに着手されたものも含め順次取り組みが始まっているところ。本日は、各路線の主な取り組みをワーキングの代表からご紹介いただく。委員の皆様におかれては、実施にあたってのご助言等をお願いしたい。また、メディアの皆様におかれては情報発信にご協力いただきたい。

さて、７月１日から JR 全国６社のご協力により兵庫デスティネーションキャンペーンがスタートした。土地の個性や風土を意味する「兵庫テロワール旅」と題し、兵庫ならではの食や文化や体験をご用意している。

また、大阪・関西万博の開催まで２年を切る中、SDGs を体現する地域の主体的な活動そのものを１つのパビリオンと見立てて、多くの方々に体験していただく「ひょうごフィールドパビリオン」を全県展開している。現時点で 130 のプログラムを認定している。今年５月には、これらの取り組みが評価され、内閣府の SDGs 未来都市・自治体 SDGs モデル事業に認定された。

こうした県外・国外からの県内各地域への誘客の機会を捉え、JR ローカル線の利用拡大につなげていくことが大切だ。引き続き皆様にもご協力いただき、ともに頑張って参りたい。

これまでも申し上げてきたとおり、鉄道というインフラは古くから地域の生活、発展を支えてきた基幹インフラであり、次の時代に引き継いでいくのは我々の責務であると考えている。４月には改正地域公共交通活性化再生法が交付されたが、まずは利用促進に取り組み、ローカル線を活性化することが重要であると考えている。その意味でも、本日は、先進的な利用促進策を展開されている北条鉄道から藤井様にお越しいただき、特色ある取り組みをご紹介いただく。今後の参考にさせていただきたいので、よろしくお願い申し上

げる。
　本日の会議で活発な議論や知見の共有がなされることを期待申し上げ、開会のご挨拶とさせていただく。

＜資料説明＞
◆資料１「WT からの報告」について説明(各ＷＴ代表委員)

◆資料２「兵庫デスティネーションキャンペーン」について説明(國弘委員(ＪＲ西日本兵庫支社長))

◆資料３「北条鉄道株式会社の今とこれから」について説明(藤井部長(北条鉄道(株)))

＜有識者コメント＞
【谷本委員(鳥取大学教授)】※欠席のためコメントを読み上げ
　２月に開催された前回の協議会でもコメントさせていただいたとおり、紹介いただいたこれらの対策を淡々と実施するのではなく、効果が得られそうな対策を特定し、横展開するなど、戦略的に実施することが必要。そのためにも、今後も協議会やワーキングチームを継続し、多様な組織の間でのコミュニケーションを続けていくことが重要だと感じている。また、併せて、今後の PDCA をまわす上で、利用促進の結果がどうであったかのデータが不可欠。これを必ず記録するようにお願いする。
　一方、人口が減少するわが国においては利用を増やすことそのものに自ずと限界があるので、利用が少なくてもやっていけるという視点が決定的に重要。この視点がなければ長期的には衰退するより他ないので、様々な組織が協働しながら、これまでにはないビジネスモデルづくりに向かっていただきたい。また、鉄道に乗ってもらうという考えに限定することなく、「新たな鉄道の使い方、付き合い方」という視点で、地域にとっても鉄道会社にとっても儲かる可能性を探ることも大切。
　電子チケットの販売、どこでも定期券や学割のチケットが購入できるサービスなど、人が少ない地域は様々なサービスのテストマーケティングの場にもなる。新たなサービスの実験の場としても位置付け、そこに住民や起業家も含めた幅広い方々の参画があれば、これまでとは違った展開もあるのではないか。ご紹介のあった令和５年度の取り組みには、豊岡市内でのキャシュレス決済に向けた実証実験をはじめ、そのような対策も盛り込まれており、一歩でも前進することを期待している。

【古田委員(兵庫県立大学特任教授)】※欠席のためコメントを読み上げ

兵庫デスティネーションキャンペーンでは「兵庫テロワール旅」をテーマとし、今年の夏、本番を迎える。テロワールとは、土地の個性・風土を指している。本来はワインの産地の分類などで使用される言葉だが、今回、兵庫県の土地の個性・風土を活かした「食」をはじめ「文化」や「伝統」の魅力をより強く感じ受け取り、その“いとなみ”を五感で感じ、「ここにしかない」旅体験を提供しようとしている。

テロワールな場所へ誘うものの重要な体験のひとつが「ローカル鉄道での移動」でもある。旅の醍醐味のひとつは、そこで出会う「現地の人々とのふれ合い」。その場所のシンボルでもある「駅」、「駅舎」や「列車」、移動途中に見える「車窓風景」など、それらはローカル鉄道があるからこそのオリジナル体験。地域の風土や人、情報をつなぐ重要な役目としてのローカル鉄道は、そもそも「公的」な目的により創設された「公民連携的」な存在であると考えている。

本年の兵庫DC、そして2025年の万博に向けた機会を通じて、ローカル鉄道の存続や促進、活用の視点からも、じっくり地域のみなさんとともに考えていただきたい。

兵庫テロワール旅の視点であらたに造成した地域の観光コンテンツを、続く万博に向けてのひょうごフィールドパビリオンへとつないで行こうという流れで考えている。

ひょうごフィールドパビリオンとは、各地域でそれぞれの課題解決に取り組むプレーヤーが発信する「体験」と訪問者との「対話」の場を通じて、地域の魅力の再発見や再構築につなげようというもの。ローカル鉄道の在り方などもまさに主要課題のひとつ。本会議の中では、ローカルの視点を持ちながらも、グローバルな視点での議論となることを期待している。世界の共通課題としている気候変動含めたSDGsの実践等も含め、本会議の議論が実のあるものになることを願っている。

【畑本委員((株)緑葉社代表取締役)】

私からは、まちづくり、主に不動産、空き家を開発してまちをつくっていくというハード整備の立場からコメントさせていただく。ソフトコンテンツの造成や地域の方々を巻き込んだ取り組みというのは、去年からの流れでたくさん開発されてきた。北条鉄道は、先輩格として色々な取り組みをされており、ご発表を聞きながら妄想が膨らんだ。

今年度末以降、取り組みを検証していくタームが始まっていくと認識しているが、ハード側の仕掛けはあまりない。北条鉄道からのご発表では、駅舎そのものをパン屋や社会福祉法人にお貸ししてというような連携事例があり感心した。

行政や鉄道会社が有する駅前の敷地で、色々な民間のハード投資を育み、最終的に利用促進に繋げるような仕掛けづくりは検討していく価値がある。これに関してはやはり時間もかかるし、それこそ姫新線では太市駅が、関西陸運と組んでという事例もあるが、そう

いったものをどう促していくのかというのも、このテーブルで議論していってもいいのではないかと感じている。

ハード側の整備とソフトコンテンツの間の話でいくと、加古川線のサイクルトレインの話は片山市長が以前からずっとおっしゃっていて、住まわれている方が鉄道をまた新たな形で利用する、ハイブリットな仕掛けだと感じている。これから実証実験だということだが、何か補足あればお聞かせいただきたい。

＜意見交換＞

【片山委員(西脇市長)】

今年のゴールデンウィークに奈良県の近鉄田原本線、翌日は朝 4 時半に起きて、ＪＲ西日本きのくに線の新宮駅まで行き、サイクルトレインを視察した。田原本線は地元のサイクリストの方、ＪＲきのくに線はクラブ活動帰りの中学生が乗車されていた。ＪＲ西日本和歌山支社はこのサイクルトレインで、自転車の活用推進に貢献したということで、国土交通省から令和４年度、自転車活用推進功績者表彰を受賞している。

ただ、近鉄もＪＲも、通学時間帯には実施されていない。近鉄は 9 時から 15 時までで 1 車両 16 台まで乗せられるが、逆に言うと、9 時から 15 時までしかサイクルトレインは運行していない。今回私どもが提案しているのは、通学時間にサイクルトレインを運行するもので、初の試みになるのではないかと思っている。

6 月 14 日には、サイクルトレインの調査にイタリアのミラノまで自費で行ってきた。「Inspire the Next 」と書かれた日立製の車両が走っており、そのロゴの横には自転車マークがある。自転車の後ろにはコンセントのマークまであり、ヨーロッパのサイクルトレイン事情は進んでいる。

ミラノの中央駅、阪急でいうと梅田のようなターミナル駅では、普通に自転車が乗り入れている。また、大阪でいうと御堂筋線のような地下鉄がミラノの中央駅から繋がっているが、地下鉄の混雑した状況の中でも自転車を乗り入れることが可能になっていた。地元のジェトロ・ミラノの職員の方に大丈夫なのかと訪ねたら「邪魔なんですけどね」と言いながらも許容している様子で、これからの時代はそういう時代なのかと思った。

文部科学省が 3 年をめどに、休日のクラブ活動の地域移行を進める。これは複数の中学校の学生が、例えば市営のグラウンドに行って、地域の方々から指導を受けるというイメージだ。5 月 26 日に 22 の市町で構成される播磨広域連絡協議会総会、また、7 月 10 日は 40 の市町で構成されている兵庫県道路協会の総会において、この休日のクラブ活動の地域移行に向けて、サイクルトレインを「Student Hyogo」と私が勝手に名付けてアピールをしてきたが、多くの方から良い反応をいただいた。特に 1 人の市長はゴルフ部の例を出し、地域移行では、ゴルフ練習場に学生が教えに来て、そこで中学生が集まってゴルフを教わるが、

そういう中で、電車が空いてる休日に自転車を乗せて来てもらうというのは、とても相性が良いと話をしていた。鉄道というのはすごく大事な社会インフラなので、こういう部分で県としても取り上げていただければありがたい。

【國弘委員（ＪＲ西日本兵庫支社長）】

今、西脇市長から、非常に含蓄のあるお話をいただいた。今、通学時間帯に高校生を対象としたサイクルトレインの実証実験に向けて、ＪＲと西脇市とで、いろいろと細部の詰めを行っているところである。

西脇市では、小中学校の統合問題等も計画されているが、将来の地域をどういうかたちで創っていくか、そのなかに交通をどう位置づけるか、通学で鉄道利用の方もいらっしゃれば、自転車利用の方もいらっしゃる、その人達の移動をどのような形で確保していくか、そういった視点の提起だったと捉えている。

そういう意味では、昨年来申し上げているように、未来に向けた地域交通のあり方というものを、まちづくり等をふまえて議論していくことも大事だと思っているので、このサイクルトレインを通していろいろと学ぶこともあると思うので、それを今後活かしていきたい。

先日７月６日、加古川線のワーキングチームに出席するため、私も朝早く谷川駅７時４２分発、いわゆる通勤時間帯の列車に乗って西脇市駅まで行った。朝、通学や通勤で一番利用が多い時間帯だが、谷川駅で乗られていたお客様は３名、途中乗ったり降りたりしながら、西脇市駅で降りた方が１０名、うち高校生６名という状況だった。１両編成の車両だが、車両定員１１４人、うち座席定員が４０人のところ、乗車が１０人というのが現実。兵庫県ではＳＤＧｓの取り組みを推進されているが、総重量４０トンの列車に１０人の乗車、１人あたり４トンの車両で運んでいるということが、本当に地域交通としてサステナブルなのか、利便性も改善できるのではないかという議論も是非していきたい。

まずは、皆さんからいただいた利用促進策、その実効性があるものは、責任を持って取り組んでいきたいと考えている。

【関貫委員(豊岡市長)】

北条鉄道からご紹介いただいた中で、地域の方や社会福祉法人の方が駅舎を改装して利用されたりする例があったが、駅舎をお貸しになる場合に、いわゆる通常の家賃をお取りになっているのか。

【藤井部長((株)北条鉄道)】

家賃は基本的になしで、電気代と水道代だけいただいている。

【関貫委員(豊岡市長)】
駅舎や駅周辺の遊休地を有効に活用することで、利用促進策につなげていくことが大切だと思っているが、ＪＲからは家賃の支払をお願いされた事例がある。空いている敷地については、電気代水道代の実費を払うというような形式で提供していただくことはできないのか。

【國弘委員(ＪＲ西日本兵庫支社長)】
使用目的次第だと考えている。無償で譲渡したり、貸し出したりしているケースもある。営利目的であれば、賃料をいただくことになる。どのようなことをやるのか、具体的な話があれば協議、話し合いさせていただきたい。私たちとしても、沿線や駅周辺がにぎわってご利用に結びつくことはやっていきたい。

【守本委員(兵庫県企画部長)】
北条鉄道では、婚活の相談所とか切り絵教室とか、人が集まる公益的な面白い取り組みを積極的にされていたので、そういった形での駅舎の利用は、広げていく可能性があると感じた。ＪＲにまたご相談をさせていただきたい。

＜閉会挨拶＞
【服部委員(兵庫県副知事)】
本日は長時間にわたり熱心にご議論いただき、感謝申し上げる。また、円滑な会議の進行にご協力いただき重ねて御礼申し上げる。
本日は、本年度の１回目の協議会ということで、各ワーキングから、本年度の主な取り組みについてご説明をいただいた。現時点で調整中のものもあるが、総じて自治体の皆様、地域住民、学校、そして地域活動団体など皆様方のご努力により、日常利用促進のための利用者の補助や、地域の高校生によるマイレール意識の醸成、そしてパークアンドライドの駐車場やカーシェアといった少しハード寄りの取り組みなど、二次交通対策といった様々な観点から意欲的な取り組みが動き出したというふうに感じた。地域のワークショップ、そういった利用促進策を考える話し合いの場、そしてファンクラブの創設、そういった活動は地域を支えていくきっかけになるものと考えている。また、こういった取り組みがワーキングとか協議会の場だけではなくて、いかに実社会に浸透していくか、そして県民ひとりひとりが我がごととしてどれだけとらえていただくかということが大変重要である。事業の実施に合わせて、より積極的なＰＲ活動についてご協力をお願いしたい。
ＪＲ西日本様からは、兵庫ＤＣの取り組みをご紹介いただいた。７月１日には、オープニングセレモニーが知事出席のもと、華々しく開催されたところ。駅の中や列車内のほか

雑誌やインターネットで、様々な場面で広告や特集を目にする。本日ご質問いただいたような、JR さんのご協力に改めて感謝申し上げる。

長く厳しかったコロナ禍も５類の移行により、通常の社会、経済活動が戻ってきた。これからは夏休みを迎え、人の動きも更に活発化していくものと思われる。まずは県内観光産業の早期回復とその先にある地域の活性化が期待される。本日のワーキングチームからのご報告の中でも、兵庫ＤＣの期間中に合わせた取り組みがあった。そういった相乗効果にも期待したい。

また北条鉄道様からは、ボランティア駅長とか各種のイベント、そしてクラウドファンディングによる車両購入など、まさに我々が見習うべき多様な取り組みをご紹介いただいた。各ワーキングの取り組みの中でも取り入れることができる部分がたくさんあったかと思うので、引き続きワーキングの皆様におかれては今日の北条鉄道の発表を参考にしていただきながら、更なる磨き上げにご検討いただきたい。

兵庫全体の中に活力を維持していくためには、地域を支える鉄道線の存続というのは非常に重要であると考えている。そのためには、沿線で暮らす人々が課題を共有し、地域一体となってまさに我がごととして取り組むことが何より大事だと考えている。県としても、今後ともこの協議会やワーキングを通じて、自治体やＪＲ西日本としっかり連携・協力して利用促進に向けて取り組んでいくので、引き続き皆様のご協力をお願いする。